

## 先スペイン期ペルー北部高地におけるラクダ科飼養の開始と変遷

### —動物考古学的アプローチから—

清家 大樹

(筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程・聖マリアンナ医科大学解剖学講座)

#### はじめに

南米ラクダ科動物は、アンデス山脈に分布する高度適応をした大型偶蹄類である。アンデス地域において最優先種であり、狩猟採集から国家形成までの長い過程の中で、重要な貢献をしてきた。特に、紀元前 4000 年頃にアンデス地域で家畜化されてからは、ラクダ科動物は運搬、労働力、毛や肉の供給源、また、祭祀などに用いられ、その後のアンデス地域の諸社会にとって極めて重要な貢献をした。ただし、その利用法などの意味合いは社会ごとに変化していったことが予想される。

南米ラクダ科動物と人間の関係との変化（すなわちラクダの利用法、重要性）は、遺跡出土動物骨資料の特徴の変化にも痕跡を残していると考えられる。そのような諸特徴の分析、比較を通じて、以下のことについて明らかにする。

- ① アンデスにおける社会変化
- ② ヒトと動物との関わりの変化により、動物がどのように改変されるかを記載すること
- ③ ヒトと動物との改変のフィードバックの関係を解明すること

ただし、現代では南米ラクダ科動物の野生種の自然分布域と家畜飼育の地域とがほぼ重なっているため、遺跡からラクダ科動物が出土した場合、それが野生種か家畜種かを推定することは現時点では非常に難しい。しかし、スペイン人による征服を受ける以前のアンデス社会においては、より広範囲にラクダ科家畜が分布していたことが、征服時のスペイン人による記録や考古学的証拠から明らかになっている。

そこで、本論では、ペルー北部高地の遺跡から出土したラクダ科動物骨を資料として扱う。ペルー北部高地は現代のラクダ科野生種の自然分布域外であり、遺跡から出土した場合、それが家畜種であると推定が可能だからである。

また、本論では形成期、ワリ期、インカ期という 3 時期に属する遺跡から出土した動物骨の分析を行う。それぞれは、比較的安定した社会といわれているペルー北部高地において大きな変化が見られた時期であるため、社会変化とヒトと動物とのかかわりがどのよう

に変化していくのかを見るのに適している。より詳細には、ラクダ科家畜の導入時期、南部からワリ社会が到来する時期、そして南部からインカ社会が到来する時期である。さらに、他の考古学資料と照らし合わせながら、動物を利用するという行為が社会関係にどのように影響を与えていくのか、そうしたヒトと動物とのフィードバックの関係を見ていく上で、これらの資料は適している。

## 本論で扱う時期について

本論で取り扱う時期は形成期、ワリ期、インカ期の3時期である。これら3つの時期は、社会変化が他の地域に比べて少なかったとされるペルー北部高地において、大きな社会変化が起こった時期とされる。

形成期（形成期後期/前期ホライズン：前800年-前250年）は、国家が存在する前の時期である。この時期の社会は、これまで比較的平等的な性格を持つ社会だとされていたが、これまで日本調査団が手がけたクントゥル・ワシ遺跡の結果などを考慮すると、形成期の後半には、神殿で執り行う儀礼など宗教面を司る集団（指導者）が次第に権力を掌握していったと考えられている。そして、地域的にも地域間の物流が活発化していく時期でもある。こうした時期において、ペルー北部高地にラクダ科動物が拡散していったことが明らかになっている。以上を考慮すると、形成期における社会においてラクダ科動物にどのような役割があったのかということ考察することは意味のあることであると考えられる。

ワリ期（中期ホライズン/カハマルカ中期：後550年-後900年）は、ペルー中央高地に位置するワリ遺跡を中心とする社会がペルー全土に勢力を伸ばした時期であり、その凡アンデス的な現象から、中期ホライズンとも呼ばれる。ワリ社会やティワナク社会のようなラクダ科動物と密接な関わりのある社会には、現在に通じるラクダ科動物利用の原点を見ることが出来、また現代以上に複雑な社会とラクダ科利用とが密接に関わっていたと考えられ、先スペイン期におけるラクダ科動物利用について考察するのに重要な時期である。

インカ期（後期ホライズン/カハマルカ晩期：後1250年-後1532年）は、ペルー南部高地のクスコを中心とするインカがアンデス全土に勢力を伸ばし、アンデス全土を統一する時期である。インカ社会はワリ以降地域的に社会が細分化され、多様化したアンデス地域を一つにまとめたが、その中でラクダ科動物は様々な役割を負っていたことが明らかとなっている。「帝国」といわれるインカ社会において、ラクダ科動物が地域社会の中でどのように利用されていたのかを考察することは、インカ社会と動物利用との関係を考察するうえで重要である。

## 資料と分析方法について

本論で扱う資料は、ペルー北部高地に位置する、形成期、ワリ期、インカ期にあたる時期にそれぞれ機能した 7 遺跡から出土した動物骨資料である。形成期に属する遺跡としては、クントウル・ワシ遺跡、パコパンパ遺跡、ワリ期はバーニョス・デル・インカ遺跡、エル・パラシオ遺跡、インカ期はサンタ・デリア遺跡、タンタリカ遺跡である。

各遺跡の資料については、ラクダ科の構成比、骨格部位頻度、年齢構成、計測値の 4 つの視点に基づいて分析を行う。それぞれの視点において、時代毎、遺跡間で比較を行い、それぞれのラクダ科の重要性や利用方法について明らかにしていく。



図 1. 本論で扱うペルー北部高地の遺跡の位置



図 2. 本論に関連する遺跡の位置とワリ社会、インカ社会との関係

## 死者とともに生きる：シカン遺跡における宗教儀礼の本質とその変容過程について

松本 剛

(南イリノイ大学人類学科博士課程)

### 【要旨】

本研究発表は、発表者・松本の博士論文研究の現時点での成果を要約したものである。ペルー北海岸北部ラ・レチェ谷中流域に位置する大規模祭祀センター（シカン遺跡）を中心に隆盛を誇った中期シカン社会（AD 950-1100）に焦点を当て、当時の宗教儀礼の本質とその後の変容過程について議論する。

本研究においては、儀礼は宗教信仰やイデオロギー、社会組織などの受動的な反映ではなく、むしろより能動的に社会を形成・再生産・変容させる力があるとする理論的スタンスに立つ（e.g., Aldenderfer 1993; Schachner 2001）。近年の研究成果により、シカンは神政多民族国家であり、その宗教の中心には神格化された支配者層の祖先の崇拜信仰と関連儀礼があったと仮定されており（Shimada 2009; Shimada, et al. 2004）、島田ら（2004）はこれらの儀礼活動が支配者層の社会的地位やアイデンティティの（再）定義、社会的不平等の正当化に役立ったと考えている。本研究の課題はこれらの仮説をさらなる考古学発掘とそれに続く遺物分析によって再検証し、祖先崇拜関連儀礼が当時の社会において果たした役割やその変容について考察することにある。

これまでの先史宗教を対象とした研究は、民族歴史学資料や図像データに過度に依存するものが多く、考古学コンテキストや遺物に関する詳細なデータが比較的軽視される傾向があった。また祖先崇拜研究においては、十分な実証的証拠なしに埋葬が出土すれば安易に「祖先の墓」とであると断定してしまう事例も少なくなかった（Whitley 2002）。こうした状況に対し本研究では、儀礼行動そのものの復元を可能にするかもしれない考古学コンテキストや遺物データの重要性を回復させると同時に、異種データ間の比較・統合を目指す。たとえば民族学的知見から得られる祖先崇拜に広く共通する特徴などが儀礼行動として具象化および物質化する場面を想定し、その物質的痕跡が発掘において観察・記録できるか否かを検証する。

以上のような理論的・方法論的背景のもと、松本はシカン遺跡の中心部にて実施された発掘調査に参加し、データ採取を行った。シカン遺跡の中心部は四つの大規模祭祀建築とそれらに囲まれた大広場と呼ばれる公共スペースから成る。主要な祭祀建築はその上部に多彩色壁画に彩られた神殿構造を備え、その麓は墓地として機能していた。2006年には祭祀建築のひとつであるワカロロの西側の麓で見付かった墓地、2008年には大広場の一面にて発掘を行った。これらの発掘では、死者の埋葬や埋葬後も続いた生者との交流、金属工房、饗宴、儀礼用用水路を使った献酒など、祖先崇拜の存在を示唆する諸活動の痕跡が記録され、上述の島田らの仮説を裏付けることとなった。出土遺物（土器、動植物など）の

観察および分析から、饗宴にはアイデンティティや社会的地位のことなる人々が参加し、死者と生者の間でラクダ科動物の肉を分け合っていた可能性が持ち上がった。また、中期シカンの末期に儀礼に変化が生じ、新しい形式が植民地時代まで続くことが確認された。この変化は、ほぼ同時期に起こった社会的・環境的变化と合わせればうまく解釈できる。

#### 【キーワード】

宗教の考古学、祖先崇拜、儀礼、饗宴、広場、シカン/ランバイエケ

#### 【参考文献】

Aldenderfer, M.

1993 Ritual, Hierarchy, and Change in Foraging Societies. *Journal of Anthropological Archaeology* 12(1):1-40.

Schachner, G.

2001 Ritual Control and Transformation in Middle-Range Societies: An Example from the American Southwest. *Journal of Anthropological Archaeology* 20(2):168-194.

Shimada, I.

2009 Who were the Sicán? Their Development, Characteristics and Legacies. In *Precursor of the Inka Empire: The Golden Capital of Sicán*, edited by I. Shimada, K. Shinoda and M. Ono, pp. 25-61. Tokyo Broadcasting System Television, Tokyo, Japan.

Shimada, I., K. Shinoda, J. Farnum, R. S. Corruccini and H. Watanabe

2004 An Integrated Analysis of Pre-Hispanic Mortuary Practices: A Middle Sicán Case Study. *Current Anthropology* 45(3):369-402.

Whitley, J.

2002 Too Many Ancestors. *Antiquity* 76(291):119-126.